

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

研究進捗状況報告書の概要

1 研究プロジェクト

学校法人名	関西学院	大学名	関西学院大学
研究プロジェクト名	情動概念の再構築: 心理学の新たな挑戦		
研究観点	研究拠点を形成する研究		

2 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究プロジェクトの目的は、実証的な心理学の成果を社会に還元するための研究と情報発信拠点の創設であり、とくに未解明な点が多いポジティブ情動に着目しながら、情動の機能と社会的役割を解明し、情動概念の再構築を試みることである。個人や社会が探究し続けている「幸せ」の実現には情動の理解が必要不可欠であり、その中核となるポジティブ情動はネガティブ情動に比べると細分化されておらず、情動特有の弁別特徴を持たないことなど概念や機能について未解明な部分が多い。また、人間の複雑な情動反応やコミュニケーション過程における情動を伴った意識に上らない潜在的過程についても未だ解明されていない部分が多い。

そこで本研究プロジェクトでは、神経科学を含んだ実験系心理学の基礎から臨床や社会・工学的側面も含んだ応用研究までを網羅した専門家チームを構成し、大きく2つのサブテーマ:(1)ポジティブ情動の機能や生起に着目した情動メカニズムの解明、(2)コミュニケーション過程での情動の役割の解明、を設定し、各サブテーマについて、ヒトを対象にした情動喚起実験による生理反応の測定と認知・行動レベルへの影響、実験動物を対象にしたニューロン活動と脳内物質動態の検討に関する研究を展開し、プロジェクトの後半からは、前半で蓄積してきた研究成果を統合させ、情動概念の再構築を試み、最先端の学術的知見と技術を教育・臨床現場や産業界に積極的に還元し、安全・安心を超えた幸せな生活環境の創造と社会の実現に資するための研究成果を提供する。

3 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

各実験施設・システムの構築・整備を行った後、現在プロジェクトを順調に推進中である。本研究プロジェクトの前半では、上記のサブテーマのうち、(1)を中心に個人内(個体内)での研究を展開しており、ヒトを対象にした情動喚起実験研究においても、動物を対象にした神経生理学的研究においても着実な成果を挙げている。今後、両者の研究成果を融合し、個人レベルでの科学的知見を基に、(2)の社会レベルでの情動の機能と多面的影響を解明するための準備を進めている。以下に、これまでの研究成果の概要を示す。

(1)ポジティブ情動の喚起実験を通して、情動状態の違いによって皮質の活動生起パターンが異なること、アルファパワー左右差の脳内基盤と自律神経系が関係を持っていること、複合的な情動であるノスタルジアの生理的特徴を明らかにした。また、これまで実験的な検討が困難であった好奇心について探索行動の動機に着目し、実験的に操作可能な行動課題を用いて、その機能やその神経メカニズムについて検討したことは、情動生起メカニズムの解明に大きな示唆を与えるものと言える。

(2)コミュニケーション過程におけるポジティブ情動の役割に関する研究では、ノスタルジア状態によって他者の顔評価が変容すること、身体的魅力の実験からポジティブ情動が注意を惹きつける機能を有すること、幼児とその母親を対象にした実験からポジティブ情動を示す他者に対する子どもの反応を観察し、ポジティブ共感の発達メカニズムを検討したことは、応用研究への発展可能性を含む興味深い成果と言える。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

**平成27年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究進捗状況報告書**

- 1 学校法人名 関西学院 2 大学名 関西学院大学
- 3 研究組織名 応用心理科学研究センター
- 4 プロジェクト所在地 西宮市上ヶ原一番町 1-155
- 5 研究プロジェクト名 情動概念の再構築:心理科学の新たな挑戦
- 6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
片山順一	文学研究科	教授

- 8 プロジェクト参加研究者数
- 13
- 名

- 9 該当審査区分
- 理工・情報
- 生物・医歯
- 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
片山順一	文学研究科・教授	ポジティブ情動の生理反応測定および情動評価システムの検討	研究統括、情動の心的過程の計測と解析、情動評価システムの構築
大竹恵子	文学研究科・教授	ポジティブ情動の機能に関する実験的検討および適応に関する健康心理学的アプローチ	ポジティブ情動の機能と役割の解明、心身の健康に関する予防的実践研究への応用
佐藤暢哉	文学研究科・教授	ポジティブ情動の生起と機能に関する神経細胞レベルでの検討	情動の生起に関する神経メカニズムの解明と人間の適応過程への応用
三浦麻子	文学研究科・教授	ソーシャルメディアでの情報伝播メカニズムにおける情動の役割の検討	現代的コミュニケーションにおける情動の特徴的役割の解明とメディア開発への応用
小川洋和	文学研究科・教授	情動伝播・他者理解における潜在的情報処理過程に対する実験心理学的アプローチ	マイクロレベルでの情報伝播メカニズムの解明とマクロレベルへの適用可能性の検討
桂田恵美子	文学研究科・教授	乳幼児と親との情動伝達と相互作用に関する発達臨床心理学的検討	情動に関する情報処理と適応に関する発達支援現場への応用
成田健一	文学研究科・教授	コミュニケーション過程における情動の機能と適応に関する生涯発達心理学的アプローチ	情動の伝達と適応に関する成人・高齢者コミュニケーションへの応用
中島定彦	文学研究科・教授	人と動物の情動に関する情報伝達の学習心理学的アプローチ	情動に関する情報伝達の人と動物間コミュニケーションへの応用
小野久江	文学研究科・教授	気分・情動に及ぼすストレス対処方法に関する精神医学的研究	気分・情動に及ぼすストレス対処方法の有用性に関する科学的エビデンスの臨床現場への提供
米山直樹	文学研究科・教授	教育・臨床場面での情動の役割と適応に関する臨床心理学的検討	学校や社会適応/不適応における情動の役割と教育・臨床現場への応用

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

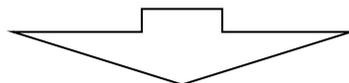
(共同研究機関等) Barbara L. Fredrickson	Kenan Distinguished Professor, University of North Carolina at Chapel Hill	ポジティブ情動の機能と情動の理論の 再考、および比較文化研究による検討	ポジティブ情動の理論および情動の 定義と新しい枠組みに関する再考と 応用可能性の検討
島井哲志	関西福祉科 学大学・教授	健康行動やリスク認知における情動の 役割に関する公衆衛生・疫学的アプロ ーチ	健康行動の予防対策に関するポジ ティブ情動の役割と公衆衛生的介入 や政策への応用
堀毛裕子	東北学院大 学・教授	ネガティブ経験後の復元におけるポジ ティブ情動の役割に関する臨床健康心 理学的検討	ネガティブ経験とポジティブ情動の元 通り効果に関する臨床健康心理学 的実践への応用

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
健康行動やリスク認知における 情動の役割に関する公衆衛生・ 疫学的アプローチ	日本赤十字豊田 看護大学・教授	島井哲志	健康行動の予防対策に関するポジ ティブ情動の役割と公衆衛生的介入 や政策への応用

(変更の時期:平成 28 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
日本赤十字豊田看 護大学・教授	関西福祉科学大学・教授	島井哲志	健康行動の予防対策に関するポジ ティブ情動の役割と公衆衛生的 的介入や政策への応用

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

11 研究進捗状況(※ 5枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

【 研究目的・意義 】

本研究プロジェクトの目的は、実証的な心理学の成果を、積極的に社会に還元するための研究と情報を発信する拠点の形成であり、とくに未解明な点が多いポジティブ情動に着目しながら、情動の機能と社会的役割に多面的かつ階層的にアプローチし、情動概念の再構築を試みることである。

これまで、関西学院大学の心理科学研究室を母体とする応用心理科学研究センターでは、学術フロンティア推進事業「先端技術による応用心理科学研究」として理工系の先端技術を取り入れ、一方、戦略的研究基盤形成支援事業「心理学を基盤とするインタラクション評価システムの開発と応用」では心理学の知見と技術を社会へ還元するために成果をあげてきた。しかしながら、心理学が貢献しうる人間の「幸せ」に関する基礎的な実証研究の知見と情報発信は十分だとは言えない。我々人間の幸せは物質レベルだけで規定することは難しく、幸せの実現には情動の理解が必要不可欠である。

そこで本研究プロジェクトでは、神経科学を含んだ実験系心理学の基礎から臨床や社会・工学的側面も含んだ応用研究までを網羅した国際的に最先端レベルの専門家によるプロジェクトチームを構成し、最先端の学術的知見と技術を教育・臨床現場や産業界に積極的に還元し、安心で安全な社会に資するための研究・情報発信拠点を形成する。そして、幸せの追求にもつながるポジティブ情動をテーマに、情動の個人内での心的機能と社会的な役割を解明し、情動概念の再構築を試みる。本プロジェクトは、21世紀から活発化している affective science、affective neuroscience と呼ばれる広範な研究領域における心理学の新たな挑戦であり、人間の幸福に資する安心・安全な社会の形成に貢献する。

【 研究計画 】

本研究プロジェクトでは、2つのサブテーマ：(1)ポジティブ情動の機能や生起に着目した情動メカニズムの解明、(2)コミュニケーション過程での情動の役割の解明、を設定している。

(1)の研究の特徴は、未解明な点が多いポジティブ情動の機能に着目し、ネガティブ情動との相互作用や文脈効果を含む心的過程や生成メカニズムを解明する点である。個人や社会が探究し続けている「幸せ」の実現には情動の理解が必要不可欠であり、その中核となるポジティブ情動はネガティブ情動に比べると細分化されておらず、情動特有の弁別特徴を持たないことなど概念や機能について未解明な部分が多い。

(2)の研究の特徴は、情報伝播における社会的な情動の役割について小集団から社会現象までミクロ・マクロダイナミズムを解明する点である。人のコミュニケーション過程では情報の送受者個人や情動価を伴う社会状況や文脈の要因等が複雑に介在し、多くの処理は意識に上らない潜在過程でなされているが、これらについても未解明な点が多い。

これら(1)(2)のサブテーマについて、ヒトを対象にした情動喚起実験による生理反応の測定と認知・行動レベルへの影響、実験動物を対象にしたニューロン活動と脳内物質動態の検討に関する研究を展開し、基礎研究としての実験的アプローチから実社会への応用を目指したアプローチという意味で多面的に検討する。また階層的な検討として、個人(個体)内の機能では神経細胞のミクロレベルから情動によって生じる個人の認知や行動といったマクロレベルまで、社会的機能では二者間での情報伝達というミクロレベルから大集団や社会全体へと情報が伝播して社会情勢に至るといったマクロレベルまでを視野にいれる。

【 年次計画 】

本研究プロジェクトは、以下のような年次計画で推進する。初年度は、各研究を適切に遂行できる研究設備・システムを構築し、予備的研究を行って研究拠点の基盤整備を行う。第2年度はシステムの拡張と、予備的研究を踏まえ、ポジティブ情動の生起や機能に関する神経細胞レベルでの検討と生理反応測定を含む実験を行う。第3年度は、ポジティブ情動の実験研究を継続しながらネガティブ情動を含めた実験へと広げ、ポジティブ情動とネガティブ情動の機能の特徴から新しい情動の枠組みの検討を試みる。第4年度は、これまでの情動機能の基礎研究と対人やコミュニケーション課程における情動の機能に関する研究成果を統合させ、個人と社会における情動の役割からプロジェクトメンバーが相互に連携して情動概念の再構築を試み、その知見の応用可能性を検討する。最終年度はプロジェクトの最終総括を行い、情動概念の再構築に関する新しい知見を広く社会の様々な領域に向けて発信する。また、教育・臨床現場や産業界からのフィードバックに基づき、感性工学にも応用可能な情動評価システムの構築を目指して次世代に向けた更なる課題設定を行う。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

(2) 研究組織

研究組織は、代表者1名と参加研究者12名(学内9名、学外3名)の計13名からなる。いずれも上述の目的を達成するための研究に従事するが、主に本研究プロジェクトのコアメンバーとして研究を推進し、基盤的知見を蓄積する研究を担う者が3名、それらの知見を踏まえて応用研究を担うものが10名という体制である。博士研究員PDは3名(2018年2月末時点)、大学院生RAは4名(同期間中のべ6名)、大学院生48名(同期間中のべ68名)が活発に研究活動を行っている。

研究代表者はこれらを統括する立場にあり、相互の積極的連携を常に促進している。前述の通り、参加研究者たちは基礎と応用のいずれかの研究を担っている。各研究者の研究テーマに応じて、それぞれがどのような情動を扱い、その情動にどのような機能や役割があるのかを、個人レベルおよび社会レベルから検討し、基礎的知見をどのようにして応用へと発展させるかという研究役割や責任の分担を意識して研究を進めている。とくに、本研究プロジェクトのコアメンバーとして研究を推進している3名は、プロジェクトに参加する博士研究員PDや大学院生RAらとの週1回のミーティングを行い、互いの研究の進行状況はもちろん、最新の国内外の知見を積極的に共有するなど密に情報交換を行い、応用研究の担当者との連携も強化するよう努めている。

このほか、本研究プロジェクトに関連した情報共有のために月1回のペースで国内外からの有識者を招いての研究会や講演会、シンポジウム、統計を含む最新の科学的知見や技術を学ぶためのワークショップ、さらに年度末には本研究プロジェクトに関する報告会を行い、研究の活性化を促すための体制を維持している。研究支援は、文学部事務組織および研究推進社会連携機構が担当している。

(3) 研究施設・設備等

本研究プロジェクトを実施している研究施設は、応用心理科学研究センター(使用総面積 601 m²、使用者数 23 名)、F 号館心理科学研究室(同 1168 m²、30 名)、ハミル館(同 451 m²、8 名)の3箇所で、事業の補助を得て整備した設備は以下の6件である。各件の、研究設備の名称(所在施設)およびその利用時間数と使用者数(2018年2月末時点)は以下の通りである。

- A. ポジティブ感情喚起システム(応用心理科学研究センター)
利用時間数: 週当たり 18 時間、使用者数 9 名
- B. 眼球運動解析システム(応用心理科学研究センター)
利用時間数: 週当たり 42 時間、使用者数 5 名
- C. ニューロン活動記録・解析システム(応用心理科学研究センター 動物実験心理学研究施設)
利用時間数: 週当たり 30 時間、使用者数 5 名
- D. 行動記録解析システム(応用心理科学研究センター)
利用時間数: 週当たり 18 時間、使用者数 9 名
- E. 眼球運動・脳波連動解析システム(応用心理科学研究センター)
利用時間数: 週当たり 42 時間、使用者数 5 名
- F. 微量生体試料分析システム(F 号館心理科学研究室)
利用時間数: 週当たり 10 時間、使用者数 2 名

(4) 進捗状況・研究成果等 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

各研究設備・システムの構築・整備を行った後、第3年度までに実施を計画していた研究プロジェクトを順調に推進中である。以下では、(1)ポジティブ情動の機能や生起に着目した情動メカニズムの解明として6つの研究(a: ポジティブ情動の生理的特徴、b: 情動価を伴う刺激呈示の違いにおける評価の変化、c: 複合情動としてノスタルジアの生理的特徴、d: ラットを用いた好奇心の神経メカニズム、e: ポジティブ情動に関連する個人の強みや主観的幸福感、f: 情動価のある画像刺激選択とその反応)、(2)コミュニケーション過程での情動の役割の解明として3つの研究(a: ノスタルジア喚起時の他者への信頼性、b: 情動を伴う身体的魅力と注意、c: 幼児のポジティブ共感の発達)の各テーマについて進捗状況と研究成果を報告する。

<現在までの進捗状況及び達成度>

(1)a 情動状態とその時間的変化を潜在的に計測できる指標の確立を目指して、皮質活動を脳波によって、身体反応(自律神経活動)を心電図によって計測し、研究を進めてきた。ポジティブな情動状態では左に比べて右側前頭部でアルファパワーが大きくなり、ネガティブな情動状態では逆のパターンを示すことが知られている。ただしこの指標を用いた研究では、ある一定期間(数分程度)全体での左右差について議論されることがほとんどであり、情動状態の時間的変化を追跡するためには、より時間分解能の高い分析が必要となる。そこで、ポジティブ情動・ネガティブ情動を喚起する動画視聴中の脳波・心電図を記録し、アルファパワー左右差、心拍数の時間的変化を分析し、成果は現在国内誌論文として投稿中である。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

(1)b ポジティブ情動に関連する刺激呈示の頻度や状況・評価の違いが反応に及ぼす影響について実験的に検討し、刺激弁別の際の刺激の抑制と要求が相対的に現れること、対象の評価がポジティブに変化する単純接触効果が内的に生じたイメージに対しても生じること、食画像刺激の呈示によって評価が減少する感性満腹感において食物刺激に注意を向けることが重要であることを示した。(成果* 1, 2, 3)

(1)c ヒトには単一の情動だけでなく、複合的な情動も存在しているが、その1つとしてポジティブ情動が主であるノスタルジア(懐かしさ)に着目し生理的特徴について検討した結果、自律系指標のうち心拍変動における高周波成分に特徴的な変化が見られた。脳波ではこれらの変化は見られなかった。また、ノスタルジアを感じる程度(喚起量)に個人差があるかを検討した結果、抑うつ傾向の高さ、主観的幸福感の高さがノスタルジア感情の喚起量と正に関連することがわかった。この結果は、情動状態に関わる個人特性の程度がその情動の方向性に関わらず、ノスタルジア喚起の程度と関連することを示している。(成果* 7)

(1)d 情動のポジティブな側面を構成している要素の1つとして、好奇心が挙げられるが、実験的操作の難しさからその機能に関する解明はされていない。そこで、探索行動の動機に着目し、好奇心を実験的に操作可能な行動課題を開発して好奇心の機能やその神経メカニズムについて検討してきた。動物が生体内に保持している周辺環境に関する情報と実際の周辺環境に含まれる情報に誤差があった場合に探索行動が惹起されると考えることができるため、ラットを用いて、装置内に視覚情報としてランダムウォークドットパターンを呈示し装置内部でのラットの行動を観察したところ、環境に含まれる情報量が大きくなるほどラットの探索行動量が増大することが示された。この結果から、周辺環境の情報量を操作することによって探索行動を操作することが可能となることが示唆される。

(1)e ポジティブ情動に関連した個人特性としてヒューマンストレンクスと呼ばれる強みは、日々の個人の情動経験や状態、心身の健康と関連することが指摘されている。そこで、児童の強みと心身の状態との関連を検討するために児童を対象にした強みの認識と活用尺度を開発した。また、個人の主観的幸福感の高さが食刺激に対するポジティブ情動の喚起と関連していること、ポジティブ共感や親切が主観的幸福感に及ぼす影響についても検討した。(成果* 4, 5)

(1)f ネガティブな結果をもたらす対象に対する反応の切り替えについて、視覚刺激として無意味図形の画像を、指標としてキー押しに要した反応時間を測定し、実験を行った。その結果、ポジティブ画像とネガティブ画像、もしくはポジティブ画像と中性画像が同時呈示された場合に、参加者はほとんど判断を誤ることなく素早くポジティブ画像を選択すること、一方で、ネガティブ画像が中性刺激と呈示された場合には、不適切にネガティブ画像を選択する傾向が示された。

(2)a ノスタルジア状態によって他者の信頼性評価が向上するかどうかという点に焦点を当て、その認知的特徴も調べたところ、ノスタルジア状態を喚起することで他者顔の信頼性を高く知覚することが明らかになった。このことは、ノスタルジア状態が顔知覚に対しても影響を与えることを初めて示している。

(2)b ポジティブ情動を引き起こす1つの要因として身体的魅力に着目し、身体的魅力にどのぐらいの速さで注意が惹きつけられるのか(時間的特徴)、身体部位のどこに注意が惹きつけられるのか(空間的特徴)という2点について注意の有用な指標である事象関連脳電位(ERP)を用いて検討した。その結果、刺激呈示後 200-250ms で身体的魅力の高い異性に注意が惹きつけられること、そして、この注意の補捉は刺激の物理特性(コントラストや輝度)や刺激呈示方法の影響を受けないことが示された。(成果* 6)

(2)c 幼児期における共感発達過程について検討を行ってきた。1歳と2歳の子どもに焦点を当て、複数の状況における他者(母親と実験者)のネガティブ情動を示す演技の目撃を通して子どもの共感的反応に相手の情動の手がかりの明確さが与える影響を検討した。また、複数のポジティブ状況における他者への子どもの反応の観察から、他者の達成に対するポジティブ共感が年齢とともに発達することを示した。さらに2歳児を対象に、課題達成時の被称賛経験が他者の達成への共感に与える影響についても、様々な課題を用いて実験的に検討し、一連の研究から、女兒は母親の達成時に男児よりも情動的に共感しやすいことや、日常的に達成を多く経験している子どもは、母親の達成時に共感しやすいことが明らかになった。

<特に優れた研究成果>

(1)a ポジティブ動画時には動画開始直後からアルファパワー左右差が生じていたが、ネガティブ動画時には動画開始後しばらくしてからアルファパワー左右差が生じた。これは、情動状態の違いによって皮質の活動生起パターンが異なることを示唆する初めての成果である。また、特定の動画において、アルファパワー左右差の変動と心拍変動が同期するような振る舞いが観察された。この結果は、アルファパワー左右差の脳内基盤と自律神経系が関係を持っていることを示し、情動生起のメカニズム解明に対し大きな示唆を与えるものである。これらの研究知見は、現在国内誌論文として投稿中である。

(1)b 情動価を含む刺激を繰り返し呈示したり抑制することによって反応の違いがみられるかを実験的に

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

検討し、刺激弁別の際の刺激の抑制と要求が相対的に現れ、対象の評価がポジティブに変化するには、対象にさらされた状況と評価の状況が一貫していることが重要であることを明らかにした。また、感性満腹感の現象生起には食物刺激に注意を向けることが重要であることも見出した。これらの知見は、認知心理学や健康心理学領域において特筆すべき知見であり、その成果はすでに国際誌および英文論文として公表されている。応用研究への展開の可能性も含めて有益な知見だと高く評価できる。(成果* 1, 2, 3)

(1)c ポジティブ情動の特徴を明らかにする上では、ネガティブ情動との相互作用や複合情動状態での機能の解明はヒトの複雑な情動反応を理解する上では重要であるが、これまでノスタルジアが持つ特徴は不明であった。そのような中で、本研究はノスタルジア状態の生理的特徴や個人差を初めて明らかにしたという点において特筆すべき成果だといえる。これらの研究知見は、日本心理学会第81回大会優秀発表賞を受賞し、現在、一部を学会誌論文として投稿中である。(成果* 7)

(1)d 好奇心は行動の動機づけにおいて重要な役割を担うと考えられるが、実験場面において好奇心を惹起させることが困難であるため、その機能やメカニズムについては実験的検討が十分になされていない。この点について、探索行動が好奇心を反映する行動であることに着目した。探索行動の神経機序を検討することは、好奇心に対する新たな知見を提供する上で重要である。したがって、視覚刺激を用いてラットの探索行動を惹起させることが可能な行動課題を作成した点は重要であると言える。

(1)e 児童を対象にした強み尺度の開発はわが国では初の成果であること、ポジティブ共感とは直接的に主観的幸福感を高めるだけでなく親切の動機や認識を介して主観的幸福感を高めることが示された。また主観的幸福感の高い人は、食刺激をはじめ日常場面でポジティブ情動が喚起されやすい可能性が示唆され、この成果は国際誌論文として掲載され、応用に発展できる興味深い知見だと評価できる。(成果* 4, 5)

(1)f ポジティブな結果をもたらす対象が同時に呈示された際に、ネガティブな結果をもたらす対象は回避されること、一方、中性画像とネガティブ画像が呈示された際には、ネガティブな結果が予測されるネガティブ画像を不適切に選択する傾向が示された。これらはポジティブ情動に関する結果の予測や反応の違いにおける興味深い知見と考えられる。

(2)a ノスタルジア状態における生理的特徴の解明に関する研究知見に加えて、ノスタルジア状態によって他者の顔評価が変容することを発見した。ノスタルジア状態が持つ機能の背景には、これらの生理的・認知的な変化があることを初めて示しており、応用研究にも発展できる可能性を含む興味深い成果だと言える。これらの研究知見は、現在国際誌論文として投稿準備中である。

(2)b ある刺激が観察者の注意を惹きつけない状況を作り出しても身体的魅力が高い異性は観察者の注意を素早く惹きつけること、すなわち、いかなる時も身体的魅力を無視することが困難であることを見出した。このことはポジティブ情動が持つ注意に関する重要な機能の1つを示していると考えられた。これらの研究知見は、現在国際誌論文として投稿準備中である。(成果* 6)

(2)c これまでの研究では、他者のネガティブ情動に対する共感からモデル検証も行われてきたが、共感喚起状況に関する検討は不十分であった。ポジティブ情動を示す他者に対する子どもの反応を観察したことも新たな試みであり、学術的な意義が高いと言える。とくに、自他分離の機能は、ポジティブ情動に対する共感には当てはまらない可能性が示唆され、ポジティブ共感とは独自の発達メカニズムを持つことが考えられる。これらの知見は、現在学会誌論文として投稿中である。

＜問題点とその克服方法＞

(1) 研究計画を進める上での計測システムの運用等は順調であり、これまでのところシステムの活用状況も含めて大きな問題はなく、研究を進められている。

(2) 実験場面や課題の選定等に時間を要した点以外は、現在のところ大きな問題は生じていない。研究プロジェクトの後半に移行するにあたって(1)の知見を踏まえて(2)の研究を進める予定である。

＜研究成果の副次的効果(実用化や特許の申請など研究成果の活用の見通しを含む。)＞

(1) 情動状態の時間的変化を追跡できる可能性について成果を得たことは大きな意味がある。例えば、将来的には、ストレス状態後のポジティブ情動喚起による「元通り効果」や、ポジティブ情動喚起によるストレス耐性(レジリエンス)などについても、その背景にある生理状態をオンラインで追跡できるバイオマーカ一の開発なども可能性がある。また、好奇心は教育場面などで重要な動機づけを担うことから、好奇心についてその機序や神経メカニズムを明らかにすることは、応用場面への適用が期待される。さらに、本研究で主として調べてきたノスタルジアは、人生満足感や幸福感と関連する。したがって、本研究によってノスタルジアに関する生理的および認知的特徴が明らかになることで、複合的な情動の特徴という学術的貢献だけでなく、一般の人々の幸福な生活に繋がるという副次的効果が期待される。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

(2) ポジティブ情動とネガティブ情動の複合状態であるノスタルジアの特徴を、対人コミュニケーション過程における社会的機能という観点から明らかにすることは、向社会的行動に代表される人間の社会を維持する仕組みの解明にもつながる極めて応用可能性が高い成果だと期待できる。このほかの幼児期とその母親を含む親密な対人関係での研究や対人魅力に関する基礎的研究に関する知見についても、今後、研究を展開し、応用的側面に寄与しうる成果を目指す。

＜今後の研究方針＞

これまで行ってきた(1)(2)の研究を統合し、個人と社会における情動の役割について様々な立場のメンバーで議論を行い、情動概念の再構築を試みる。そして、とくに応用研究の担当メンバーを中心に、本研究プロジェクトから得られた知見の実社会への応用や展開の可能性について議論する。

(1) 情動喚起をより統制し、情動状態・生理状態変化のメカニズムについて実験的に検討する。また、これまで扱った指標を用いて、情動が認知機能に影響を及ぼす時間的プロセスなどについても検討する。動物実験研究では、引き続き探索行動を量的に操作可能な行動課題を開発する。特に、複数の行動指標を総合的に評価し、探索行動の量を適切に評価したうえで評価することを念頭に置いて進めていく。さらに、体温などの生理的な指標をとり、複合的に行動を評価していく予定である。また、好奇心の神経メカニズムを明らかにするために、安定的な神経活動の記録を行い、神経活動と行動との対応関係を重視して研究を進めていく。特に探索行動中の神経活動について検討していく予定であるが、情報誤差が探索行動を惹起するのであれば、脳内で環境情報が何らかの形で符号化、統合、比較されていなければならないため、そういった機能を担うような神経活動があるのかについても検討していく予定である。

(2) コミュニケーション過程におけるポジティブ情動の役割の解明を目指して、向社会的行動に関する対人認知に焦点を当てる。(1)で開発された情動喚起手法を活用しながら現実場面に近い形での向社会的行動の認知実験手法の妥当性を検討し、様々なポジティブ情動状態(喜びやリラックスなど)の認知的特徴と社会的機能の解明を目指す。また、幼児や児童を対象にしたポジティブ情動に関する能力の発達的な視点からの検討も継続して行い、より現実場面に近い形での実験の実現と、ポジティブ情動に関する能力の横断的な変化についても詳細に検討し、人類の幸福に資する科学的知見の提供を目指す。

＜今後期待される研究成果＞

本プロジェクトの研究テーマは、未解明な点が多いポジティブ情動に着目しながら情動の機能と社会的な役割を様々なアプローチから検討し、情動概念の再構築を試みる挑戦的なものである。ポジティブ情動の不応性や文脈効果、ネガティブ情動との相互作用から情動の役割やメカニズムを再検討し、神経生理学を含んだ実証的検証を重視して新しい情動の枠組みを再考することが、本プロジェクトに期待される研究成果と位置づけている。人間の心身の健康を支える予防的な新しい実践研究への発展、社会に対しては様々な感情価を伴った流言などの諸問題に対する予防と安全確保のためのアプローチが期待でき、工学や産業界では、ニーズが高い情動評価システムの構築だけでなく、これまでの社会システムが十分に機能する上での規制条件となっている人間の意思決定メカニズムへの理解不足を解消し、公正で活発な市場やよりよい集団的意思決定のシステムなどの構築における礎となる知識を提供する。そして、このことは、心理科学の究極の応用である幸せの探求にもつながる新しい学術的な知見を生むだけではなく、社会的にもインパクトのある新しい視点や方法論の提供を促し、その応用可能性は広範囲にわたると考えられる。

これまでの前半に行ってきたプロジェクトのサブテーマ(1)(2)の枠組みを超えて統合した研究課題について検討を継続しながら、ポジティブ情動の機能の解明と新しい情動のとらえ方に関する枠組みを検討し、情動概念の再構築とそれに基づいた心理モデルの提案を目指したい。また、これまでの各研究成果をもとに最終的に研究プロジェクト全体を統合させ、多様な知見を精力的に学術的成果として公刊し、社会への応用を目指した様々な領域への情報発信も積極的に行う。このように本プロジェクトでは、安全・安心を超えた幸せな生活環境の創造を目指して実証的な心理科学の成果を教育・臨床現場さらに産業界を含むより広い社会に積極的に情報を発信することを目指す。

＜自己評価の実施結果及び対応状況＞

学内評価体制として、関西学院大学研究推進社会連携機構内に評価委員会が設置されている。本進捗状況報告書をもって年内に学内評価を行い、フィードバックを受ける予定である。

＜外部(第三者)評価の実施結果及び対応状況＞

本研究プロジェクトの成果(中間評価)については、学外の2名の心理学の専門家に研究の進捗状況を報告し、外部(第三者)評価を受ける予定である。

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 情動メカニズム (2) ポジティブ情動 (3) ネガティブ情動
 (4) コミュニケーション過程 (5) 生理反応 (6) 神経生理
 (7) 幸せ (8) 心理科学

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

1. *¹ Inoue, K., Otake, K., & Sato, N. (in press). Satiety change elicited by repeated exposure to the visual appearance of food: Importance of attention and simulating eating action. *Journal of Health Psychology Research*.
2. *² Inoue, K., Yagi, Y., & Sato, N. (2018). The mere exposure effect for visual image. *Memory & Cognition, 46*, 181-190.
3. Van Cappellen, P., Rice, E. L., Catalino, L. I., & Fredrickson, B. L. (2018). Positive affective processes underlie positive health behaviour change. *Psychology & Health, 33*, 77-97.
4. Ono, H., Yamamoto, K., Taketani, R., Tsujimoto, E. (2017). Use of interpersonal counseling for modern type depression. *A Case Report in Psychiatry*, Article ID 9491348, 5 pages
5. Katsurada, E., Tanimukai, M., Akazawa, J. (2017). A study of associations among attachment patterns, maltreatment, and behavior problem in institutionalized children in Japan, *Child Abuse & Neglect, 70*, 274-282.
6. Kimura, T., & Katayama, J. (2017). Regularity of approaching visual stimuli influences spatial expectations for subsequent somatosensory stimuli. *Experimental Brain Research, 235*, 1657-1663.
7. Kimura, T., & Katayama, J. (2017). Visual stimuli approaching toward the body influence temporal expectations about subsequent somatosensory stimuli. *Brain Research, 1664*, 95-101.
8. 中島定彦・遠座奈々子 (2017). 不安症状の再発—パヴロフ型条件づけの基礎研究と理論から—*基礎心理学研究, 35*, 163-177.
9. *³ Inoue, K., & Sato, N. (2017). Valuation of go stimuli or devaluation of no-go stimuli? Evidence of an increased preference for attended go stimuli following a go/no-go task. *Frontiers in Psychology, 8*, 474.
10. *⁴ Otake, K., & Kato, K. (2017). Subjective happiness and emotional responsiveness to food stimuli. *Journal of Happiness Studies, 18*, 691-708.
11. *⁵ 小國龍治・大竹恵子 (2017). 児童用強み認識尺度と児童用強み活用感尺度の作成及び、信頼性と妥当性の検討 *パーソナリティ研究, 26*, 89-91.
12. 杉原聡子・米山直樹 (2017). 目標行動選定用シートを用いた短縮版ペアレント・トレーニングの試み *人文論究, 67*, 43-60
13. 文瑞穂・米山直樹 (2017). 自閉スペクトラム症児に対する構造化を用いた介入 —音楽の模擬授業場面を対象に— *関西学院大学心理科学研究, 43*, 33-39.
14. 荒岡茉弥・米山直樹 (2017). 自閉スペクトラム症児に対する宣言言語・要求言語の自発の促進に関する研究 *関西学院大学心理科学研究, 43*, 41-48.
15. 登日温子・成田健一 (2017). 上手なあきらめができる人—社会的認知学習理論からあきらめ現象を捉える— *関西学院大学心理科学研究, 43*, 75-84.
16. 箕浦有希久・成田健一 (2017). 自尊感情の複数回測定とその展望—測定方法と研究目的に注目して— *関西学院大学心理科学研究, 43*, 1-18.
17. 辻道英里奈・植田瑞穂・桂田恵美子 (2017). 大学生の向社会的行動および共感性と親子関係との

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- 関連 関西学院大学心理科学研究, 43, 29-54.
18. 島井哲志・津田恭充. (2017). ポジティブ心理学からみたレジリエンス: 幸福と健康を増進するために (特集 レジリエンスのための心理学). 臨床心理学, 17, 677-681.
 19. Wilson, T. E., Weedon, J., Cohen, M. H., Golub, E. T., Milam, J., Young, M. A., Adedimeji, A. A., Cohen, J., & Fredrickson, B. L. (2017). Positive affect and its association with viral control among women with HIV infection. *Health Psychology, 36*, 91-100.
 20. Van Cappellen, P., Fredrickson, B. L., Saroglou, V., & Corneille, O. (2017). Religiosity and the motivation for social affiliation. *Personality and Individual Differences, 113*, 24-31.
 21. 箕浦有希久・成田健一 (2016). 2項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情の測定—実験的に操作された場面想定法による妥当性の検討— パーソナリティ研究, 25, 151-153.
 22. 佐藤暢哉 (2016). 共感性研究に齧歯類を対象とすることの意義 —神前・渡辺論文へのコメント— 心理学評論, 58, 295-298.
 23. 鈴木麻希・永井成美・大竹恵子 (2016). HAQ-Cで評価した小学生の攻撃性と心臓自律神経活動、食生活、運動習慣の関連 子どもと心のからだ日本小児心身医学会雑誌, 25, 202-211.
 24. *6 伏田幸平・片山順一 (2016) 身体的魅力に対する注意の時間的推移 人文論究, 66, 25-45.
 25. 大森駿哉・片山順一 (2016). 行動・生理指標を用いたポジティブ感情の機能や状態の解明: 拡張—形成理論とフローを中心として 人文論究, 66, 51-68.
 26. Nakajima, S. (2016). Running induces nausea in rats: Kaolin intake generated by voluntary and forced wheel running. *Appetite, 106*, 85-94.
 27. 箕浦有希久・成田健一 (2016). 2項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情測定尺度の開発—妥当性に関する多側面からの検討— 感情心理学研究, 23, 78-86.
 28. 金喬・米山直樹 (2016). 知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症幼児に対する課題分析を用いた着替え指導 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 13-18.
 29. 西川若菜・米山直樹 (2016). 自閉スペクトラム症児に対するPECSを用いた要求行動の形成—エラー—修正法の変更を加えた指導— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 7-12.
 30. 里見香奈・成田健一 (2016). 「自己」にかかわる心理学的研究の計量書誌学的分析——わが国の学会誌に掲載された実証論文のタイトル分析: 1980年—2013年—— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 25-32.
 31. 田宮めぐみ・米山直樹・松見淳子 (2016). 放課後等デイサービスで参加児童が集団活動中に示す離席行動に対する機能的アセスメント研究 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 19-24.
 32. 山本亜実・大城未緒・南由歩・竹谷怜子・小野久江 (2016). 乗馬初心者に対する乗馬体験の心理的・生理的影響 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 1-5.
 33. Kimura, K., & Katayama, J. (2016). Cooperative context is a determinant of the social influence on outcome evaluation: An electrophysiological study. *International Journal of Psychophysiology, 100*, 28-35.
 34. 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2016). ラットの扁桃体基底外側核損傷が強化子の価値低減効果に及ぼす影響 人文論究, 65, 63-74.
 35. 松永昌宏・小林章雄・柴田英治・大竹恵子・大平英樹 (2016). 幸福感を高める心理学的介入による心身の健康の増進 *Medical Science Digest, 42*, 2-5.
 36. 三浦麻子・鳥海不二夫・小森政嗣・松村真宏・平石界 (2016). ソーシャルメディアにおける災害情報の伝播と感情: 東日本大震災に 際する事例 人工知能学会論文誌, 31, NFC-A_1-9.
 37. 里見香奈・成田健一 (2016). 「自己」にかかわる心理学的研究の計量書誌学的分析——わが国の学会誌に掲載された実証論文のタイトル分析: 1980年—2013年—— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 25-32.
 38. 山本亜実・大城未緒・南由歩・竹谷怜子・小野久江 (2016). 乗馬初心者に対する乗馬体験の心理的・生理的影響 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 1-5.
 39. 金喬・米山直樹 (2016). 知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症幼児に対する課題分析を用いた着替え指導 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), 42, 13-18.

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

40. 西川若菜・米山直樹 (2016). 自閉スペクトラム症児に対するPECSを用いた要求行動の形成—エラー—修正法の変更を加えた指導— 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), *42*, 7-12.
41. 田宮めぐみ・米山直樹・松見淳子 (2016). 放課後等デイサービスで参加児童が集団活動中に示す離席行動に対する機能的アセスメント研究 関西学院大学心理科学研究 (関西学院大学文学部総合心理科学科), *42*, 19-24.
42. 島井哲志・大久保亮・氏家達夫・筒井雄二. (2016). 公衆衛生活動としてのポジティブ心理学介入の可能性—福島の子どものレジリエンスをめざして. 保健師ジャーナル, *72*, 746-750.
43. 島井哲志・増田公男. (2016). 子どもたちへの死生観教育の心理社会的基礎: ポジティブ心理学による死生観教育 (特集 あらためて死について考える). 保健の科学, *58*, 518-523.
44. Fredrickson, B. L. (2016). Selective data analysis in Brown et al.'s continued critical reanalysis. *PLOS One*, *11*, e0160565.
45. Fredrickson, B. L. (2016). *Love: Positivity resonance as a fresh, evidence-based perspective on an age-old topic*. In L. F. Barrett, M. Lewis, & J. M. Haviland (Eds.), *Handbook of Emotions*, 4th edition (pp. 847-858). New York, NY: Guilford Press.
46. Isgett, S. F., Algoe, S. B., Boulton, A. J., Way, B. M., & Fredrickson, B. L. (2016). Common variant in OXTR predicts growth in positive emotions from loving-kindness training. *Psychoneuroendocrinology*, *73*, 244-251.
47. Rice, E. L. & Fredrickson, B. L. (2016). Of passions and positive spontaneous thoughts. *Cognitive Therapy and Research*, 1-12.
48. Van Cappellen, P., Toth-Gauthier, M., Saroglou, V., & Fredrickson, B. L. (2016) Religion and well-being: The mediating role of positive emotions. *Journal of Happiness Studies*, *17*, 485-505.
49. Van Cappellen, P., Way, B. M., Isgett, S. F., & Fredrickson, B. L. (2016). Effects of oxytocin administration on spirituality and emotional responses to meditation. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 1-9.
50. Kawai, T., Yamada, H., Sato, N., Takada, M., & Matsumoto, M. (2015). Roles of the lateral habenula and anterior cingulate cortex in negative outcome monitoring and behavioral adjustment in nonhuman primates. *Neuron*, *88*, 792-804.
51. 三浦麻子・小森政嗣・松村真宏・前田和甫 (2015). 東日本大震災時のネガティブ感情反応表出—大規模データによる検討— 心理学研究, *86*, 102-111.
52. 成田健一 (2015). 高齢者のパーソナリティ 老年精神医学雑誌, *26*, 1405-1416.
53. 杉原聡子・米山直樹 (2015). 自閉スペクトラム症児の運筆 訓練時における親の指導行動に対するビデオ・フィードバック 行動分析学研究, *30*, 13-23.
54. Adair, K. C. & Fredrickson, B. L. (2015). Be open: Mindfulness predicts reduced motivated perception. *Personality and Individual Differences*, *83*, 198-201.
55. Fredrickson, B. L., Grewen, K. M., Algoe, S. B., Firestone, A. M., Arevalo, J. M. G., Ma, J., Cole, S. W. (2015). Psychological well-being and the human conserved transcriptional response to adversity. *PLoS ONE*, *10*(3): e0121839.
56. Garland, E. L., Farb, N. A., Goldin, P. R., & Fredrickson, B. L. (2015). Mindfulness broadens awareness and builds eudaimonic meaning: A process model of mindful positive emotion regulation. *Psychological Inquiry*, *26*, 293-314.
57. Garland, E. L., Farb, N. A., Goldin, P. R., & Fredrickson, B. L. (2015). The mindfulness-to-meaning theory: Extensions, applications, and challenges at the attention-appraisal-emotion interface. *Psychological Inquiry*, *26*, 377-387.
58. Hogan, C. L., Catalino, L. I., Mata, J., & Fredrickson, B. L. (2015) Beyond emotional benefits: Physical activity and sedentary behavior affect psychosocial resources through emotions. *Psychology & Health*, *30*, 354-369.

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

<図書>

1. 佐藤暢哉 (2017). 第3章第3節 空間学習, 第4節 社会的学習 堀忠雄・尾崎久記(監修)坂田省吾・山田富美雄(編) 生理心理学と精神生理学 第I巻 基礎. 北大路書房.
2. 片山順一・鈴木直人 (編) (2017). 生理心理学と精神生理学 第II巻 応用. 北大路書房
3. 佐藤暢哉 (2017). ラットの援助行動. 堀忠雄・尾崎久記(監修)片山順一・鈴木直人(編) 生理心理学と精神生理学 第II巻 応用. 北大路書房.
4. 佐藤暢哉・小川洋和 (編) (2017). 心理学ベーシック第2巻 なるほど! 心理学実験法: 北大路書房.
5. 片山順一 (2017) 第1章 中枢神経系指標の特徴と測り方・ノウハウ 第1節 電気活動記録: 脳波と事象関連脳電位 三宅晋司(監修)商品開発・評価のための生理計測とデータ解析ノウハウ 東京:(株)エヌ・ティー・エス
6. 大竹恵子 (編) (2017). なるほど! 心理学調査法 三浦麻子 (監修) 心理学ベーシック第3巻 北大路書房
7. 大竹恵子 (編) (2016). 保健と健康の心理学—ポジティブヘルスの実現 ナカニシヤ出版.
8. 大竹恵子 (2015). 第6章 ポジティブ心理学 西垣悦代・堀正・原口佳典(編), コーチング心理学概論 (pp. 119-138) ナカニシヤ出版.

<学会発表>

1. Sanada, M., Kobayashi, M., Otake, K., & Katayama, J. (2017). Frontal alpha power asymmetry shows different temporal pattern between negative and positive emotions. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
2. Sugimoto, F., Kimura, M., Takeda, Y., & Katayama, J. (2017). Involvement of temporal attention in task-difficulty effect on P3a. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
3. Yamagata, T., Katayama, J., & Murata, A. (2017). Emotionally supportive messages reduced attention to social exclusion cues: An event-related brain potential (ERP) study. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
4. Fuseda, K., & Katayama, J. (2017). You cannot ignore a person with high physical attractiveness. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
5. Kimura, T., & Katayama, J. (2017). The contingency between self-action and intervening events generates the expectation of subsequent result. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
6. Naka, S., & Katayama, J. (2017). The effect of task difficulty and response type for duration discrimination on distraction. 57th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
7. Ogai, T., & Nakajima, S. (2017). Comparison of three extinction procedures for extinction of avoidance behavior in rats. The 43rd Annual Convention of the Association for Behavior Analysis: International.
8. Nakajima, S. (2017). What clay eating talks about running-based taste avoidance in rats. XXIX International Conference of the Spanish Society for Comparative Psychology.
9. Oguni, R., & Otake, K. (2017). Relation among character strengths, positive empathy, and subjective happiness. 31st Conference of the European Health Psychology Society.
10. Michino, S., Hirata, R., & Sato, N. (2017). Contextual semantic comprehension of a word written with different Japanese orthography. The 57th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
11. 廣瀬真理子・高岡しの・庭山和貴・杉原聡子・荒岡茉弥・米山直樹・松見淳子 (2017). 青年期発達障害者の家族に向けたコミュニケーション支援プログラムの効果の検討—自治体と大学が協働する地域発達支援 ②— 日本認知・行動療法学会第43回大会.

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

12. 荒岡菜弥・清水莉奈・椎木泰華・米山直樹 (2017). 自閉スペクトラム症児に対するカテゴリー化訓練とネーミング訓練による片付け行動の形成 日本行動分析学会第35回年次大会.
13. 渡邊佳奈・米山直樹 (2017). 自閉スペクトラム症児を対象とした遊びにおける交互交代行動の獲得に向けた環境設定 日本行動分析学会第35回年次大会.
14. 杉原聡子・金 喬・富井あゆみ・米山直樹 (2017). 発達障害のある子どもの親の参加者間相互ビデオ・フィードバックの効果の検討 日本行動分析学会第35回年次大会.
15. 文瑞穂・潮海幸紀・米山直樹 (2017). 自閉傾向の男児に対する交互交代遊びの獲得のための刺激性制御の検討-終わりの回数が不確定なゲームを用いて- 日本行動分析学会第35回年次大会.
16. 安井梨恵・金喬・米山直樹 (2017). 市町村保健センターにおける短縮版ペアレント・トレーニングのプログラムの有効性についての検討(2) 日本認知・行動療法学会第43回年次大会.
17. 杉原聡子・金喬・米山直樹 (2017). 発達障害のある子どもの親の参加者間相互ビデオ・フィードバックの効果の検討 日本行動分析学会第35回年次大会.
18. 金喬・米山直樹 (2017). ペアレント・トレーニングの効果測定を目的とするKBPAC追加項目作成の試み 日本行動分析学会第35回年次大会.
19. 栗田聡子・片山順一・Annie Lang (2017). 脱感作 vs. 鋭敏化? 暴力的ゲーム経験と情報処理: 事象関連脳電位と心拍数データによる検討 日本心理学会第81回大会.
20. 片山順一 (2017). 英語能力評価における最新の取り組み: テスト開発・教育・脳研究の立場から 日本心理学会第81回大会.
21. 久須美沙紀・中島定彦・成田健一 (2017). 犬は飼い主に似ているのか?—質問紙調査による性格の類似性検討— 関西心理学会第129回大会.
22. 中島定彦 (2017). ラットは土を食べて悪心を癒す—カオリン摂取による味覚嫌悪学習の緩和— 日本基礎心理学会第31回大会.
23. 中島定彦 (2017). エクスポージャー法による治療後の 症状再発に関する実験心理学的考察 —動物の条件づけ研究からの架橋— 日本心理学会第80回大会.
24. 中島定彦・三好由佳子 (2017). コカ・コーラのテレビ広告は条件づけ法則に合致しているか? —1960~1990年代放映のCMフィルム58本の分析— 日本心理学会第80回大会.
25. 山本亜実・竹谷怜子・辻本江美・辻井農亜・白川治・小野久江 (2017). ストレス因子を考慮した大学生の抑うつ状態に対する対人関係カウンセリングの効果 第14回日本うつ病学会総会 第17回日本認知療法・認知行動療法学会.
26. 辻本江美・竹谷怜子・山本亜実・辻井農亜・白川治・小野久江 (2017). 対人関係カウンセリングが回避的なストレス対処方法を減少させ気分改善に繋がった学生相談の一事例. 第14回日本うつ病学会総会 第17回日本認知療法・認知行動療法学会.
27. 齊藤由佳・竹谷怜子・辻本江美・山本亜実・小野久江 (2017). 双極Ⅱ型障害の服薬指導に個人心理教育の手法を用いた一例—患者と薬剤師が交互にテキストを音読する試み— 第11回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会大会.
28. 竹谷怜子・小野久江 (2017). ADHD児担当の有無による教員のQOLの違い 日本学校メンタルヘルス学会第21回大会.
29. 辻本江美・山本亜実・竹谷怜子・辻井農亜・白川治・小野久江 (2017). 大学生の抑うつ状態に対する対人関係カウンセリングの長期的効果の検討 第41回日本自殺予防学会総会.
30. *7 小林正法・真田原行・片山順一・大竹恵子 (2017). ノスタルジア状態の生理的特徴: 音楽聴取によるノスタルジア状態喚起を用いて 日本心理学会第81回大会.
31. 小林正法・大竹恵子 (2017). 抑うつ傾向と主観的幸福感がノスタルジア状態の喚起に与える影響—音楽聴取によるノスタルジア状態誘導を用いて— 日本パーソナリティ心理学会第26回大会.
32. 小國龍治・大竹恵子 (2017). 親切の強みとポジティブ感情への共感が主観的幸福感に及ぼす影響 日本心理学会第81回大会.
33. 小國龍治・大竹恵子 (2017). 自伝的記憶の想起が親切動機と認識に及ぼす影響 日本パーソナリティ心理学会第26回大会.
34. 大竹恵子・片山順一 (2017). ポジティブ感情の機能を探る:さまざまな評価法を用いたアプローチ 日本心理学会第81回大会.
35. 大竹恵子・嶋田洋徳 (2017). 日本健康心理学会における利益相反と出版倫理(2) 日本健康心理

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- 学会第30回大会.
36. 白井理沙子・小川洋和 (2017). 人物の道德情報と魅力度が視覚的気づきに及ぼす影響. 日本社会心理学会第58回大会.
 37. 藤山北斗・佐藤暢哉 (2017). 模写の正確性を高める昇目の効果 第81回大会日本心理学会.
 38. 大塚拓朗・片山順一 (2017). 懸念的被透視感と隠匿情報検査の反応の関係 第35回日本生理心理学会大会.
 39. 木村司・片山順一 (2017). 自己の行為に対する随伴性が後続事象の空間的予測に与える影響 第35回日本生理心理学会大会.
 40. 陳香純・影山美紀・遠竹美穂子・中島定彦 (2017). 飼育下のハンドウイルカの行動に及ぼす放水の効果 2017年度春季研究発表会(応用動物行動学会・日本家畜管理学会合同発表会).
 41. 植田瑞穂・桂田恵美子 (2017). 1, 2歳児が経験する達成・被賞賛状況についての予備調査 日本発達心理学会第28回大会.
 42. 谷向みつえ・桂田恵美子・赤澤淳子 (2017). 施設入所児のアタッチメント表象と愛情ネットワークの特徴 日本発達心理学会第28回大会.
 43. Sanada, M., Fuseda, K., & Katayama, J. (2017). EEG frontal alpha power asymmetry can evaluate temporal dynamics of our emotion. 24th Annual Meeting of Cognitive Neuroscience Society.
 44. Fuseda, K., Matsubara, A., & Katayama, J. (2017). Sadness can be related to the approach motivation: Evidence from frontal alpha power asymmetry. 24th Annual Meeting of Cognitive Neuroscience Society.
 45. 西村友佳・小川洋和 (2017). 潜在的態度の変化に対する魅力的な顔の効果 日本心理学会「注意と認知」研究会 第15回合宿研究会.
 46. 白井理沙子・小川洋和 (2017). 視線の送り手の道德違反が注意誘導および選好判断に与える影響 日本心理学会「注意と認知」研究会 第15回合宿研究会.
 47. Nishimura, Y., & Ogawa, H. (2017). Exposure to attractive faces modulates implicit moral attitude. The 2017 Annual Conference of the Korean Society for Cognitive and Biological Psychology.
 48. 高橋友子・米山直樹 (2016). 新人看護職員の離職意向に関連する要因の検討 第36回日本看護科学学会学術集会.
 49. 竹谷怜子・辻本江美・山本亜実・辻井農亜・白川治・小野久江 (2016). 大学生の抑うつ状態に対する対人関係カウンセリングの効果 第16回日本認知療法学会.
 50. 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2016). Oxytocin enhances rat's helping behavior for stranger. 日本動物心理学会第76回大会.
 51. 佐藤暢哉・石井沙希 (2016). Effects of social interactions on spatial learning in a lattice maze. 日本動物心理学会第76回大会.
 52. 湯川徳子・大竹恵子 (2016). 食物刺激呈示による感性満腹感は摂食量に影響するか 日本健康心理学会第29回大会.
 53. 金田亜里沙・大竹恵子 (2016). 自身に対する楽観性と親密な他者に対する楽観性: 母子間での比較 日本健康心理学会第29回大会.
 54. 小國龍治・大竹恵子 (2016). 児童版強み認識尺度と児童版強み活用感尺度の作成及び信頼性と妥当性の検討 日本健康心理学会第29回大会.
 55. 井上和哉・大竹恵子 (2016). 視覚的な感性満腹感の生起における注意の重要性 日本健康心理学会第29回大会.
 56. 玉越勢治・片山順一 (2016). ミスマッチ陰性電位を指標とした聴覚情報処理の時間的側面における研究 第46回日本臨床神経生理学会学術大会. シンポジウム
 57. 安枝貴文・小川洋和 (2016). 自己名に対する情動価—運動—一致性効果と自己表象の関係の検証 日本基礎心理学会第35回大会.
 58. 白井理沙子・小川洋和 (2016). トライポフォビア喚起画像のスペクトラム特性が意識的気づきに与える影響 日本基礎心理学会第35回大会.
 59. 植田瑞穂・桂田恵美子 (2016). 乳幼児期におけるポジティブ共感—1, 2歳児の行動についての探

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- 索的検討— 日本教育心理学会第58回総会.
60. 文瑞穂・米山直樹 (2016). 自閉スペクトラム症児に対する構造化を用いた介入—音楽の模擬授業場面を対象に— 日本行動分析学会第34回年次大会.
 61. 荒岡茉弥・米山直樹 (2016). 自閉スペクトラム症児に対する宣言言語・要求言語の自発に関する研究 日本行動分析学会第34回年次大会.
 62. 椎木泰華・川西舞・米山直樹 (2016). 知的能力障害を伴うASD児に対するトークン・エコノミー法の回顧的研究—従事行動または正反応に対応させて— 日本行動分析学会第34回年次大会.
 63. 杉原聡子・金喬・米山直樹 (2016). 大学附属の相談所における保護者支援プログラムの検討 日本特殊教育学会第54回大会.
 64. 杉原聡子・米山直樹 (2016). ADHD児の登校行動と宿題行動に対するトークン・エコノミー法による家庭内支援の検討 日本行動分析学会第34回大会.
 65. 箕浦有希久・高橋伸彰・成田健一 (2016). 心理調査におけるSatisficing回答傾向(1)—紙筆版質問紙調査とWeb調査の比較— 日本社会心理学会第57回大会.
 66. 白井理沙子・小川洋和 (2016). 道徳判断が視線による自動的な注意誘導に与える影響 日本社会心理学会第57回大会.
 67. Kimura, T., & Katayama, J. (2016). The spatial expectation for subsequent somatosensory stimuli is modulated by regularity of approaching visual stimuli. 56th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
 68. Fuseda, K., & Katayama, J. (2016). Effect of physical attractiveness of the opposite sex on P2 to irrelevant probe stimuli. 56th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
 69. Naka, S., & Katayama, J. (2016). The Effect of the Task Type for the Distraction Effect. 56th Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research.
 70. Yasueda, T., & Ogawa, H. (2016). Movement-compatibility effect for the self and other people's names. The 31st International Congress Psychology.
 71. Ueda, M., & Katsurada, E. (2016). The development of empathic behaviors in Japanese toddlers. The 31st International Congress of Psychology.
 72. Tanimukai, M., Akazawa, J., & Katsurada, E. (2016). Patterns of Affective Relationships and Quality of life among Institutionalized Children in Japan. The 31st International Congress of Psychology.
 73. Mitsufuji, Y., & Ogawa, H. (2016). The contribution of personality impression to face-voice integration. The 31st International Congress of Psychology.
 74. Minoura, Y., & Narita, K. (2016). Examining the test-retest reliability of the state and trait version of the Two-Item Self-Esteem Scale. The 31st International Congress of Psychology.
 75. Fuseda, K., & Katayama, J. (2016). Effects of physical attractiveness of the opposite sex on heartbeat evoked potential in men. The 31st International Congress of Psychology.
 76. 林朋広・佐藤暢哉 (2016). Effects of lesions of the retrosplenial cortex on tracing the learned route in the environment with small change. 第39回日本神経科学大会.
 77. Sato, N. (2016). Episodic-like memory in rats: answering to an unexpected question about past self-behavior. 18th meeting of the International Society for Comparative Psychology.
 78. 箕浦有希久・成田健一 (2016). 2項目自尊感情尺度を用いた自尊感情の変動性の測定 日本感情心理学会第24回大会.
 79. 佐藤暢哉・稲岡慧 (2016). ヴァーチャル環境におけるルート知識の空間手がかりと主観的方向感覚との関係 日本認知心理学会第14回大会.
 80. Taketani, R., Tsujimoto, E., Yamamoto, A., Tsujii, N., Shirawaka, O., & Ono, H. (2016). IPC-Study 1: The Effectiveness of Interpersonal Counseling for Depression in Japanese Undergraduates. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention.
 81. Yamamoto, A., Taketani, R., Tsujimoto, E., Tsujii, N., Shirawaka, O., & Ono, H. (2016).

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- IPC-Study 2: The Effectiveness of Interpersonal Counseling for Stress Coping in Japanese Undergraduates. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention.
82. Tsujimoto, E., Yamamoto, A., Taketani, R., Tsujii, N., Shirawaka, O., & Ono, H. (2016). IPC-Study 3: The Effectiveness of Interpersonal Counseling for Impulsivity Response Inhibition. The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention.
83. 木村司・片山順一 (2016). 身体近傍空間および身体へ接近する視覚情報が後続する体性感覚事象の空間的予測に及ぼす影響 第34回日本生理心理学会大会.
84. 大森駿哉・片山順一 (2016). 2種類のパズルゲーム課題が脳波・自律系指標に与える影響の検討—ポジティブ感情および集中に注目して— 第34回日本生理心理学会大会.
85. 伏田幸平・片山順一 (2016). 異性の身体的魅力が無関連プローブ刺激に対する事象関連脳電位P2に及ぼす影響 第34回日本生理心理学会大会.
86. 小松丈洋・沼田恵太郎・佐藤暢哉・嶋崎恒雄・八木昭宏・宮田洋(2016). 不確実性がネガティブ感情に与える影響—SCCとNPVを指標として (2)— 第34回日本生理心理学会大会.
87. 沼田恵太郎・小松丈洋・嶋崎恒雄・佐藤暢哉・八木昭宏・宮田洋 (2016). 不確実性がネガティブ感情に与える影響—SCCとNPVを指標として (1)— 第34回日本生理心理学会大会.
88. 白井理沙子・小川洋和 (2016).無意識的処理過程に不快喚起特性が与える影響 日本心理学会「注意と認知」研究会第14回会宿研究会.
89. 片山順一 (2015). 生理心理計測の人間工学的応用(シンポジウム) 日本人間工学会第56回大会.
90. 大森駿哉・片山順一・大竹恵子 (2015). ポジティブ感情が親切行動場面における思考—行動レパートリー想起数と生理的反応に与える影響 日本心理学会第79回大会.
91. 片山順一 (2015). 言語の心理学研究・神経科学研究を応用につなげる—「わかり」の評価・可視化・促進に向けて—(シンポジウム) 日本心理学会第79回大会.
92. Kimura, T., & Katayama, J. (2015). The spatial expectation is modulated by congruency between approach of visual stimuli and location of subsequent somatosensory stimuli. 55th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
93. Naka, S., & Katayama, J. (2015). The presentation timing if task irrelevant stimuli and the distraction effect. 55th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
94. Omori, S., Otake, K., & Katayama, J. (2015). Effects of positive emotion on physiological responses and thought-action repertoires regarding helpful behavior. 55th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
95. Sugimoto, F., & Katayama, J. (2015). Difficulty of visual oddball task modulates amplitude of P3 elicited by task-irrelevant auditory distractors (Symposium). 55th Annual Meeting of the Society for Psychophysiological Research.
96. 伏田幸平・片山順一 (2015). プローブ刺激に対する P300 は身体的魅力の違いを反映する—無関連プローブ法を用いた動画刺激に対する注意量推定による検討— 関西心理学会第127回大会.
97. 木村司・片山順一 (2015). 身体に接近する視覚刺激系列の違いが後続する体性感覚事象の空間的予測に与える影 関西心理学会第127回大会.
98. 伏田幸平・小林剛史・長野祐一郎・片山順一 (2015). 心拍数で魅力を測る—高/中/低魅力の性的/非性的画像に対する心拍数の反応— 平成27年度日本人間工学会関西支部大会.
99. 大竹恵子 (2015). ウェルビーイングとパフォーマンスを高める心理学:ポジティブ心理学とコーチング心理学 (シンポジウム) 日本心理学会第79回大会.
100. 金田亜里沙・大竹恵子 (2015). 母親の自身と子に対する楽観性—子のいない既婚女性との比較— 関西心理学会第127回大会.
101. 北條由華・大竹恵子 (2015). 課題固有の自己効力感が課題成績と目標設定の変容に与える影響—ポジティブフィードバックの影響に注目して— 関西心理学会第127回大会.
102. 湯川徳子・大竹恵子 (2015). 家庭での食事場面に対する母親の意識についての研究—母娘ペア

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

- データを用いた間主観性の検討— 関西心理学会第127回大会.
103. 井上和哉・佐藤暢哉 (2015). 選択誘発性選好の生起に刺激の再評価は不要である 日本認知心理学会第13回大会.
 104. Sato, N. (2015). Effects of lesions of the retrosplenial cortex on episodic memory in rats: answering to an unexpected question about past self-behavior. 第38回大会日本神経科学学会.
 105. Hayashi, T., & Sato, N. (2015). The experiment of effect of the retrosplenial cortex lesion in shortcut task. 第38回大会日本神経科学学会.
 106. 井上和哉・佐藤暢哉 (2015). 日本の心理学の統計教育の現状—書籍の分析による予備的検討—日本教育心理学会第57回総会.
 107. 井上和哉・佐藤暢哉 (2015). 振動周波数が視覚刺激の時間知覚に与える影響 日本心理学会第79回大会.
 108. 道野菜・佐藤暢哉 (2015). 視点移動の方法が空間記憶に与える影響 日本心理学会第79回大会.
 109. 佐藤暢哉 (2015). ナビゲーションにおける意思決定 平成27年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会. シンポジウム.
 110. Kawai, T., Yamada, H., Sato, N., Takada, M., & Matsumoto, M. (2015). Outcome monitoring and behavioral adjustment by putative pyramidal neurons and interneurons in the primate anterior cingulate cortex during a reversal learning task. 45th Annual Meeting of Society for Neuroscience.
 111. Sato, N., Tate, K., Okada, M. (2015). Rats demonstrate helping behavior toward a soaked cagemate. 45th Annual Meeting of Society for Neuroscience.
 112. 山岸厚仁・佐藤暢哉 (2015). 古典的条件づけ—道具的条件づけ間転移の文脈制御 関西心理学会第127回大会.
 113. 福井隆雄・井上和哉・小松文洋・佐藤暢哉 (2015). ヘッドマウントディスプレイを用いた到達把持運動における視覚・触覚情報の寄与に関する検討 日本バーチャルリアリティ学会VR心理学研究委員会.
 114. 光藤優花・小川洋和 (2015). 静止画を用いた顔と声のマッチングにおける性格特性の印象の役割 日本認知心理学会第13回大会.
 115. 安枝貴文・小川洋和 (2015). 観察者の表情筋の操作が恐怖表情の想起に干渉する 日本認知心理学会第13回大会.
 116. 白井理沙子・小川洋和 (2015). トライポフォビア喚起画像の特性がもたらす注意処理への影響 日本認知心理学会第13回大会.
 117. 白井理沙子・坂野逸紀・小川洋和 (2015). Saccade trajectory revealed attentional capture and inhibition by tryphobic images. 第38回神経科学学会. サテライトシンポジウム.
 118. 光藤優花・小川洋和 (2015). 顔と声のマッチングにおける顔の周辺情報の役割 第7回多感覚研究会.
 119. Shirai, R., Banno, H., & Ogawa, H. (2015). The spectrum characteristics of tryphobic images evoke saccade trajectory curvatures. The 23rd Annual Workshop on Object Perception, Attention, and Memory.
 120. Katsurada, E., Akazawa, J., & Tanimukai, M. (2015). Institutionalized children's academic competence, adaptation to school, self-esteem, and people around them. The 4th Annual International Conference on Education, Psychology, and Society.
 121. 植田瑞穂・桂田恵美子 (2015). 共感テストにおける無秩序/混乱型愛着の子どもの行動 FOUR WINDS乳幼児精神保健学会第18回全国学術集会弘前大会.
 122. 植田瑞穂・桂田恵美子 (2015) 養育者評定用の幼児共感尺度開発に向けた予備的研究—母親が評定する幼児の共感の構成および妥当性— 関西心理学会第127回大会.
 123. 里見香奈・成田健一 (2015). 「自己」にかかわる心理学的研究の計量書誌学的分析—1980年代以降のわが国の学会誌における論文タイトルを対象として— 日本心理学会第79回大会.
 124. 里見香奈・成田健一 (2015). 5答法による自発的自己概念の測定—20答法との比較から— 関西心理学会第127回大会.

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

125. 中島定彦 (2015). ラットは走ると気分が悪くなって土を食べる—異食行動で測定する走行性悪心—日本基礎心理学会第34回大会.
126. Tsujimoto, E., Yamamoto, A., Taketani, R., & Ono, H. (2015). A pilot study on interpersonal counseling for depression, suicidal ideation, and stress coping strategies in Japanese undergraduates. 28th World Congress of the International Association for Suicide Prevention.
127. 辻本江美・山本亜実・竹谷怜子・小野久江 (2015). 対人関係カウンセリングが有用であった学生相談の一事例 第12回日本うつ病学会総会・第15回日本認知療法学会.
128. 山本亜実・辻本江美・竹谷怜子・小野久江 (2015) 対人関係カウンセリングによる大学生の抑うつ状態の変化について 第12回日本うつ病学会総会・第15回日本認知療法学会.
129. 杉原聡子・米山直樹 (2015). スタッフトレーニングプログラムにおけるビデオ・フィードバックの効果 日本行動分析学会第33回年次大会.
130. 岡綾子・米山直樹 (2015). 知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症児に対する協同ボール運び活動を促進する指導 日本行動分析学会第33回年次大会.
131. 金喬・米山直樹 (2015). 自閉スペクトラム症と知的能力障害を伴う幼児に対する課題分析を用いた着替え指導 日本認知・行動療法学会第41回大会.
132. 西川若菜・米山直樹 (2015). 自閉スペクトラム症児に対するPECSを用いた要求行動の形成 日本認知・行動療法学会第41回大会.
133. 杉原聡子・米山直樹 (2015). スタッフトレーニングプログラムにおけるビデオ・フィードバックの効果—指導行動間の獲得性に注目して— 日本認知・行動療法学会第41回大会.
134. 田宮めぐみ・辻本友紀子・米山直樹・松見淳子 (2015). 放課後等デイサービスで参加児童が集団活動中に示す離席行動に対する機能的アセスメント研究 日本認知・行動療法学会第41回大会.

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等
ホームページで公開している場合には、URLを記載してください。

研究成果の公開や研究会等の開催情報については、関西学院大学応用心理科学研究センターのホームページ(<http://kgu-caps.com/>)で随時情報提供している。

情動や本研究プロジェクトに関する国内外の最新の知見や理解をさらに深めるための研究会や講演会、シンポジウム、ワークショップ等を、不定期で開催している。外部から関連研究者を積極的に招聘し、毎回活発な議論と情報交換が行われている。いずれも広く学内外の関連研究者・関連機関に対して開催を告知しており、毎回多数の参加者を得ている。(以下のリストは、各回の講演者とURLを示す)。

【CAPS研究会】(2018年3月末時点 計25回開催済)

- 第1回(2015/10/26) 寺澤悠理氏(慶応義塾大学) <http://kgu-caps.com/news/133/>
 第2回(2015/11/30) 浅野良輔氏(浜松医科大学) <http://kgu-caps.com/news/179/>
 第3回(2015/12/14) 竹島康博氏(文京学院大学) <http://kgu-caps.com/news/271/>
 第4回(2016/1/29) 川合隆嗣氏(筑波大学) <http://kgu-caps.com/news/335/>
 第5回(2016/3/4) 真田原行氏(東京大学) <http://kgu-caps.com/news/484/>
 第6回(2016/3/17) 小林正法氏(名古屋大学) <http://kgu-caps.com/news/502/>
 第7回(2016/3/17) 高橋良幸氏(専修大学) <http://kgu-caps.com/news/512/>
 第8回 CAPS研究会(2016.4.5) 松永昌宏氏(愛知医科大学) <http://kgu-caps.com/news/510/>
 第9回 CAPS研究会(2016.6.2) 西口雄基氏(東京大学) <http://kgu-caps.com/news/655/>
 第10回 CAPS研究会(2016.6.29) Teresa Romero氏(東京大学) <http://kgu-caps.com/news/678/>
 第11回 CAPS研究会(2016.9.12) 上野泰治氏(高千穂大学) <http://kgu-caps.com/news/839/>
 第12回 CAPS研究会(2016.10.4) 大西賢治氏(東京大学) <http://kgu-caps.com/news/848/>

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

第13回 CAPS 研究会(2016.10.15) 有光興記氏(駒澤大学)<http://kgu-caps.com/news/851/>
 第14回 CAPS 研究会(2016.11.30) 池田功毅氏(中京大学)<http://kgu-caps.com/news/664/>
 第15回 CAPS 研究会(2016.12.13) 伊藤友一氏(慶應義塾大学)<http://kgu-caps.com/news/876/>
 第16回 CAPS 研究会(2017.5.25) 松本昇先生(京都大学)<http://kgu-caps.com/news/1361/>
 第17回 CAPS 研究会(2017.6.22) 横田秀夫先生(理化学研究所)<http://kgu-caps.com/news/1371/>
 第18回 CAPS 研究会(2017.7.3) 橋彌和秀先生(九州大学)<http://kgu-caps.com/news/1377/>
 第19回 CAPS 研究会(2017.7.13) 福島宏器先生(関西大学)<http://kgu-caps.com/news/1375/>
 第20回 CAPS 研究会(2017.8.1) 平 伸二先生(福山大学)<http://kgu-caps.com/news/1419/>
 第21回 CAPS 研究会(2017.8.1) Robin Orthey 先生(福山大学・Maastricht University)
<http://kgu-caps.com/news/1408/>
 第22回 CAPS 研究会(2017.11.6) 森口佑介先生(京都大学)<http://kgu-caps.com/news/1535/>
 第23回 CAPS 研究会(2018.1.8) 神前裕先生(早稲田大学)<http://kgu-caps.com/news/1748/>
 第24回 CAPS 研究会(2018.2.12) 和田真先生(国立障害者リハビリテーションセンター)
<http://kgu-caps.com/news/1752/>
 第25回 CAPS 研究会(2018.2.22) 松田いづみ先生(科学警察研究所)
<http://kgu-caps.com/news/1771/>

【 CAPS 講演会 】(2018年3月末時点 計6回開催済)

CAPS 講演会(2016.5.16) 柏木恵子先生(東京女子大学名誉教授)<http://kgu-caps.com/news/634/>
 CAPS 講演会(2016.6.24) 入野野宏先生(大阪大学)<http://kgu-caps.com/news/692/>
 CAPS 講演会(2017.2.20) 廣中直行先生(株式会社 LSI メディエンス 顧問)
<http://kgu-caps.com/news/885/>
 CAPS 講演会(2017.9.9) Jonathon D. Crystal 先生(Indiana University)
<http://kgu-caps.com/news/1471/>
 CAPS 講演会(2017.10.23) 川口潤先生(名古屋大学)<http://kgu-caps.com/news/1533/>
 CAPS 講演会(2018.3.6) 山崎勝之先生(鳴門教育大学)<http://kgu-caps.com/news/1733/>

【 CAPS シンポジウム 】(2018年3月末時点 計2回開催済)

CAPS シンポジウム「幸せを探る: ポジティブ感情のメカニズム解明をめざして」(2016.2.12)
<http://kgu-caps.com/news/311/>
 CAPS シンポジウム「食行動やに関わる感情 - nature-nurture 問題の新たな地平を探る」
 (2017.3.3)<http://kgu-caps.com/news/1074/>

【 CAPS ワークショップ 】(2018年3月末時点 計5回開催済)

CAPS ワークショップ(2017.3.14) 竹内理人氏(東京工業大学)<http://kgu-caps.com/news/1113/>
 CAPS ワークショップ(2017.8.2) Robin Orthey 先生(福山大学・Maastricht University)・平伸二先生
 (福山大学)<http://kgu-caps.com/news/1417/>
 CAPS ワークショップ(2018.1.27) 津田裕之先生(京都大学)<http://kgu-caps.com/news/1764/>
 第1回 CAPS 統計ワークショップ(2017.8.8) 井上雅勝先生(武庫川女子大学)
<http://kgu-caps.com/news/1393/>
 第2回 CAPS 統計ワークショップ(2017.12.16) 紀ノ定保礼先生(静岡理工科大学)
<http://kgu-caps.com/news/1665/>

【 成果報告会 】(2018年3月末時点 計3回開催済)

2015年度私立大学戦略的研究基盤形成事業報告会(2016.3.4) <http://kgu-caps.com/news/466/>
 2016年度私立大学戦略的研究基盤形成事業報告会(2017.3.3) <http://kgu-caps.com/news/868/>
 2017年度私立大学戦略的研究基盤形成事業報告会(2018.3.6) <http://kgu-caps.com/news/1959/>

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

14 その他の研究成果等

「12 研究発表の状況」で記述した論文、学会発表等以外の研究成果及び企業との連携実績があれば具体的に記入してください。また、上記11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付してください。

特になし

15 「選定時」に付された留意事項とそれへの対応

<「選定時」に付された留意事項>

該当なし

<「選定時」に付された留意事項への対応>

該当なし

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	34,940	11,648	23,292				
	研究費	38,431	19,772	18,659				
平成28年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	31,932	10,645	21,287				
	研究費	36,587	20,602	15,985				
平成29年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	36,949	20,570	16,379				
総額	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	66,872	22,293	44,579	0	0	0	0
	研究費	111,967	60,944	51,023	0	0	0	0
総計	178,839	83,237	95,602	0	0	0	0	

17 施設・装置・設備の整備状況(私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
応用心理科学研究センター	H22	601㎡	16	23			
F号館心理科学研究室	H9	1,168㎡	43	30			
ハミル館	H14	451㎡	19	8			

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

0 m²

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)

(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)							
(研究設備)							
ポジティブ感情喚起システム	2015	PKKS-DA01	1式	1746 h	9,998	6,665	私学助成
眼球運動解析システム	2015	RED500VP-SYS	1式	3696 h	9,992	6,661	私学助成
ニューロン活動記録・解析システム	2015	PHTP-1000	1式	2490 h	14,949	9,966	私学助成
行動記録解析システム	2016	KKKS-DA02	1式	1116 h	6,998	4,665	私学助成
眼球運動-脳波連動解析システム	2016	ETGVP-SYS	1式	2268 h	14,997	9,998	私学助成
微量生体試料分析システム	2016	HTEC-500ACGP	1式	710 h	9,936	6,624	私学助成
アクティブ電極脳波計測システム	2015	actiCHamp-SYS	1式	2688 h	4,996		
ソーシャルメディア実験システム	2015	SMES-001	1式	4320 h	4,908		
生体信号計測システム	2016	MaP2310SYS	1式	1350 h	4,897		
ラット情動状態測定システム	2016	RDEK	1式	2250 h	4,698		
正立顕微鏡イメージングシステム	2017	AIM2FLBFAPO-503C-NIS-1	1式	525 h	4,989		
情動状態評価システム	2017	BP-BA_ExG-SYS	1式	324 h	4,999		
(情報処理関係設備)							

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

18 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消耗品費	11,870	実験用消耗品	11,870
光熱水費	4,330	光熱水費	4,330
通信運搬費	8	郵送料	8
印刷製本費	293	印刷製本費	293
旅費交通費	147	研究旅費	147
報酬・委託料	5,554	報酬料金・委託料	5,554
(消耗図書費)	4,172	雑誌・図書代	4,172
(賃借料)	493	印刷機リース代	493
(保守・修繕料)	290	保守・修繕料	290
計	27,157		27,157
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	0		0
教育研究経費支出	0		0
計	0		0
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	11,274	教育研究用機器備品	11,274
図 書			
計	11,274		11,274
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,800		2,800
ポスト・ドクター	0		0
研究支援推進経費	0		0
計	2,800		2,800

年 度	平成 28 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消耗品費	9,888	実験用消耗品	9,888
光熱水費	4,434	光熱水費	4,434
通信運搬費	16	郵送料	16
印刷製本費	0	印刷製本費	0
旅費交通費	897	研究旅費	897
報酬・委託料	5,718	報酬料金・委託料	5,718
(消耗図書費)	3,245	雑誌・図書代	3,245
(賃借料)	541	印刷機リース代	541
(保守・修繕料)	389	保守・修繕料	389
計	25,128		25,128
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	0		0
教育研究経費支出	0		0
計	0		0
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	11,459	教育研究用機器備品	11,459
図 書			
計	11,459		11,459
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,400		2,400
ポスト・ドクター	11,208		11,208
研究支援推進経費			
計	13,608		13,608

法人番号	281004
プロジェクト番号	S1511032

年 度	平成 29 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	8,187	実験用消耗品	8,187	実験用消耗品、実験機器他
光 熱 水 費	4,101	光熱水費	4,101	電灯、動力料金
通 信 運 搬 費	0	郵送料	0	
印 刷 製 本 費	0	印刷製本費	0	
旅 費 交 通 費	1,670	研究旅費	1,670	講演者招聘旅費、研究旅費
報 酬 ・ 委 託 料	7,016	報酬料金・委託料	7,016	オンラインDB契約料、オンラインアンケート利用料、講演料他
(消 耗 図 書 費)	2,981	雑誌・図書代	2,981	洋雑誌、和雑誌他
(賃 借 料)	893	印刷機リース代	893	印刷機リース代
(修 繕 料)	8	修繕料	8	実験機器修理代
計	24,856		24,856	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	0		0	
教育研究経費支出	0		0	
計	0		0	
設 備 関 係 支 出 (1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	12,093	教育研究用機器備品	12,093	実験用設備、パソコン他
図 書				
計	12,093		12,093	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	4,800		4,800	学内4人
ポスト・ドクター	13,008		13,008	学外3人(うち2名は2016年4月より、1名は2017年4月より、非常勤講師に登用)
研究支援推進経費				
計	17,808		17,808	学内4人、学外3人